

2020年度・2021年度
地層処分事業に係る社会的側面に関する研究
成果報告会

研究件名：環境文学にみる対話のパラダイム
地層処分を話し合う〈共通語〉を求めて

研究代表者：青山学院大学 結城正美

2022年2月28日

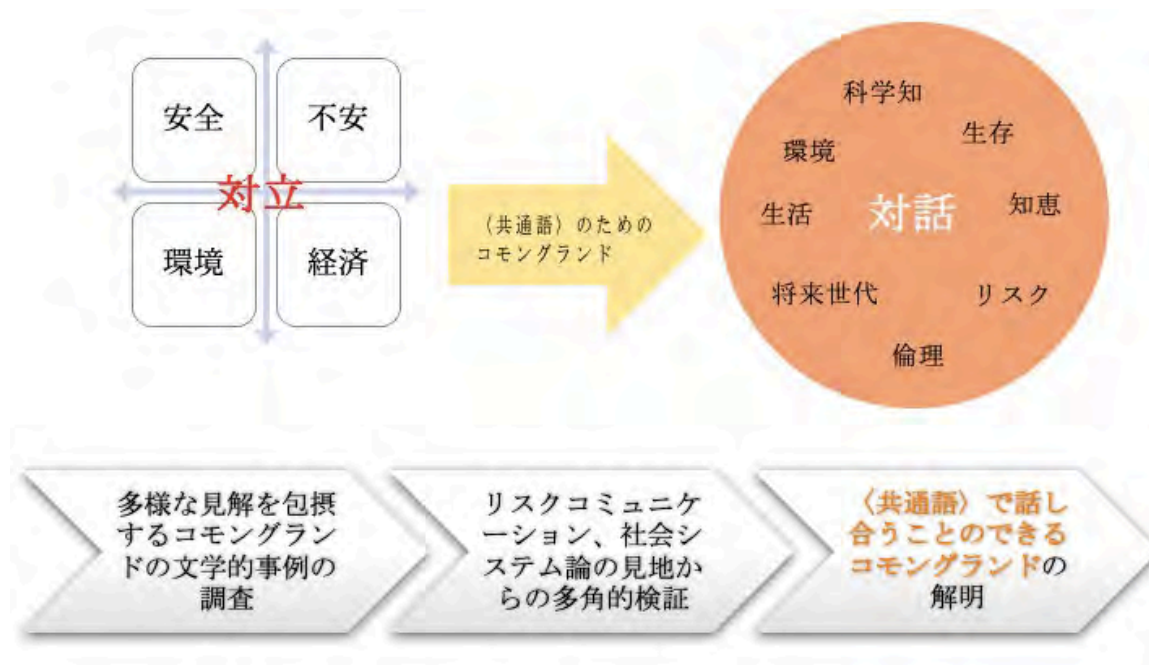
目次

1. 研究計画の概要
2. 研究成果
3. 情報発信活動等
4. 支援期間終了後の展望等

1. 研究計画の概要

研究の目的、方法、想定している学術的成果(研究の学術的新規性等)

地層処分をめぐって立場や見解の異なる人々が対話を行うためには、**多様な見解を多様なままに包摂する〈共通語〉**が必要であるという認識に立ち、そうした〈共通語〉の共有を可能にする対話のコモンランドを明らかにする。この場合の〈共通語〉は、言語に限定されるわけではなく、納得のいくまで話し合う場の創出を促すイメージや雰囲気も関連する。本研究では、文学、アート、リスクコミュニケーション、社会システム論の知を結集し、地層処分を話し合う〈共通語〉のかたちを学際的に考察する。



2. 研究成果 ①成果の要約

本支援事業において得られた内容・成果の要約

1. 地層処分に関する多様な捉え方の文学表象を抽出し、対話、対立、齟齬、折合いの文学空間を明らかにする。

地層処分実施に向けた合意形成という実務的問題に加え、以下の**思想的問題**があることを明らかにした。

- 1) HLW保管に要するとされる10万年という「地質学的時間 (deep time)」を想像することの困難
- 2) 「地層処分」言説に潜む地上中心主義的見方
- 3) 地下をめぐる想像力の欠如
- 4) 「処分」という言葉の問題

2. 〈共通語〉が成立しうる対話のパラダイムを理論的に解明する。

上記4つの問題点を考慮に含めることがHLWをめぐる熟議民主主義的対話の創出を促しうること、その際に「持続可能性」(sustainability)と「居住可能性」(habitability)という思考軸が有益であることを示した。

3. 対話の〈共通語〉のあり方を、具体的な事例をもとに明らかにする。

- 1、2で明らかにした点を黒川創の小説『岩場の上から』を例に考察した。

2. 研究成果 ②成果の詳細

本支援事業において得られた内容・成果の詳細

1. 地層処分に関する多様な捉え方の文学表象を抽出し、対話、対立、齟齬、折合いの文学空間を明らかにする。

地層処分をテーマとする国内外の文学作品（黒川『岩場の上から』、マクファーレン『アンダーランド』等）や映画（『100,000年後の安全』『地球で最も安全な場所を探して』）を考察し、以下の4点を明らかにした。

- 1) HLW保管に要するとされる**10万年という「地質学的時間 (deep time)」を想像**すること（少なくともそれに向けた努力）が必要である。
- 2) 「地層処分」という言葉は、人間の生活圏である地表に対して地下を軽視する地上中心主義を反映している。**地上中心主義の相対化（地下を海と捉える文学空間等）**
- 3) 地下からウランを「採掘」し使い捨てる（「廃棄」）行為を批判的に考察する必要性がある。**埋蔵・発掘（想像力の炸裂） ⇔ 採掘・廃棄（想像力の欠如）**
- 4) 「処分」という言葉は、それ以降は人間の責任が及ばないという考え方を孕むため、上述1)～3)を踏まえると適切であるとは言えない。**社会的価値が高く工学的機能をもつ金でHLWを包み現代社会の一部として「守護」という提案** (T. Morton)

2. 研究成果 ②成果の詳細（つづき）

本支援事業において得られた内容・成果の詳細

2. 〈共通語〉が成立しうる対話のパラダイムを理論的に解明する。

- 文献調査地を取材した記事タイトル「海と生きるか核に頼るか」に象徴されるように、HLW問題は往々にして**地元住人と行政の対立**を伴う。
- 対立の膠着や強制的解決を回避するためには、「**包摂的な対話の過程**」を**理念とする熟議民主主義**を念頭におく必要がある。
- 熟議民主主義に基づく対話の場を実現するためには、当事者の見解が強制や操作を受けないということは言うに及ばず、**多様な論点を中立的なかたちで提示**することが重要である。
- 人新世をめぐる議論では、経済や行政が重視する**持続可能性(sustainability)**は**人間中心主義**であることが指摘され、人間以外の存在や地球それ自体の健康を重視した**居住可能性(habitability)**へと**関心を向ける必要性**が示されている。
- 「海と生きるか核に頼るか」という対立構図は、**居住可能性か持続可能性かという長期的展望を導く中立的な議論の枠組みに置き直す**ことができる。

3. 情報発信活動等

インタビュー

- 結城正美インタビュー「エコクリティシズムのアクチュアリティ」『More-Than-Human』Vol.1 (2020年7月) <https://ekrits.jp/2020/07/3717/>
- 上記が再編集された書籍『モア・ザン・ヒューマン：マルチスピーシーズ人類学と環境人文学』（奥野克巳他編、以文社、2021年）

メディア報道

- 「地層処分対話 人文科学の視点を」『Energy for the Future』第45巻第3号（2021年7月5日）, pp. 20-21.
- 『図書新聞』（2022年2月発行分予定）鼎談で本研究内容を紹介。

学会発表

- Yuki, M. "Thinking Like Uranium: Planetary Imagination Toward Nuclear Waste." Asia-Norway Environmental Storytelling Network (ANEST) Online Workshop, 3 July 2021. <https://nordic-envhum.org/anest/narrating-nature-anest-workshop/>
- Yuki, M. "Redefining Survival in the Anthropocene: Literary and Artistic Interventions on Nuclear Waste Disposal Issues," STREAMS: Transformative Environmental Humanities, 4 August 2021, online. <https://www.meetstreams.com/>（科研費基盤研究 C の研究成果として発表）

大学授業

- 立教大学異文化コミュニケーション学部「自然共生特論」（2021年度春学期）
- 青山学院大学文学部英米文学科ゼミ（2021年度後期）

THE BOOK REVIEW PRESS

2022-2-12

図書新聞

3530号

〒1-59-0075東京都新宿区東田町3-1-11
ノーブル3階
(発行所)
〒1-36-0071東京都江東区豊島8-25-12
電話03(5937)3918 F.A.X 03(5937)3919
編集室(4階)〒1-48-0013東京都千代田区千代田1-48-0013
〒1-24-0689-01E 東京都千代田区千代田1-24-0689

定価300円
(本体273円)
発行 武久出版(株)

企画・編集・デザイン・校正・校閲
出版・広告用の印刷データ制作
シグナス .COM

http://www.signa-signa.com
東京都豊島区東池袋 3-1-1
サンシャイン 60、45階

鼎談

奥野克巳×近藤社秋×結城正美

シリーズ「人間を超える」(以文社)

「人間以上」という問い

More-Than-Human

奥野克巳

OKUNO Kazumi 立教大学教授

鼎談

近藤社秋

KONDO Shizuki 神戸大学講師

結城正美

YUKI Masami 青山学院大学教授

▼奥野克巳／近藤社秋×ナターシャ・フアイン編『モア・ザン・ヒューマン―マルチスピーズ人類学と環境人文学』9.15刊、A5判三二八頁・本体三二〇〇円・以文社



▼奥野克巳・シンジルト編、MOSAAMANガ『マンガ版マルチスピーズ人類学』10.31刊、A5判三四二頁・本体二六〇〇円・以文社

後年、2007年は日本でのマルチスピーズ元年であったといわれるようになった。以文社より『シリーズ 人間を超える』の刊行が続いている。既刊は2冊である。本シリーズをめぐって、『月刊奥野』のような八面六臂の活躍を続ける奥野克巳氏と、近藤社秋氏、結城正美氏に鼎談していただいた。(鼎談日・2021年12月12日、東京、池袋の立教大学にて、須藤巧、本紙編集)

マルチスピーズは多様な運動体である

奥野 以文社から『シリーズ 人間を超える』の刊行が二〇二二年秋から始まり、第一回配本のタイトルにあわせて、人間を超えて、「モア・ザン・ヒューマン」(More-Than-Human)「人間以上」を敢り上げていくというシリーズ企画です。その言葉は、結城正美さんが二〇一七年に翻訳をされた『エイヴィッド・エプソラムの「感応の呪文」―人間以上世界における知覚言語』(永声社)という著作にも使われています。

二〇二二年に邦訳された『モア・ザン・ヒューマン』のネッテルの『赤い魚の夫婦』(現代書館)は、人間と他の生物種の間のつかず離れずの関係を描いた短編集で

れます。「人間以上」の世界を思い描きます。

シリーズの第二回配本『人類学』(以下、『人間以上』)展開しているものになっています。例をマンガやエッセイでうめざわしゅんという雑誌」というマンガが、(談話)というマンガが、が研究用の動物を解放(ハンシーを病院に置き、そのハイブリッドでチャーターした)は高次元に通います。そののりをシミュレーションを「エピソード」独自の表現技法のなかに遺伝子を持つ「ヒューマン」のものになっています。

や「人間以上」の世界な糸口になりうるの。本日は、エゴクリテ正美さんにお話しした可能性、さらにはは、域について、『モア・サ

4. 支援期間終了後の展望等

本研究では、「海と生きるか核に頼るか」といった環境と経済の二元論的対立を、**居住可能性**と**持続可能性**という思考的枠組みに置き直すことにより、長期的視点に立った熟議民主主義的対話を導くことができるのではないかという見解を示した。その道筋を具体的に想像する上で文学作品が有用であることから、関連する文学作品のさらなる発掘に努めたい。

また、大学の授業等で、HLW関連文学や映画の分析を通して、学生とともにHLW問題について考え議論する場をつくっていきたいと考えている。

さらに、問題意識を共有する研究者たちと協働し、HLW問題を含む学際的な「ごみの環境人文学」に着手したいとも考えている。